

主題：薬物依存問題を持つ人の親の回復段階に応じた支援と課題

—副題：親に生起する混乱と社会関係の変容およびその回復過程に着目して

○ 日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程 氏名 安高 真弓 (8835)

キーワード：親の回復過程，親支援，薬物依存

1. 研究目的

薬物依存問題を持つ人の親（以下，親）は，薬物問題による問題を持つ子（以下，本人）の巻き起こす家庭内外での暴力や家出，逸脱行動や借金，幻覚妄想への対応など，さまざまに混乱状態に置かれている。何らかの支援につながったとしても本人の安定には長期間を要するため，親には治療その他の経済的負担がのしかかり，本人の薬物再使用に戦々恐々とする生活が長く続く。夫婦関係の変化，他の子（本人のきょうだい）への影響，自身の心身の不調なども同時多発的に発生し，家族は問題が複雑に絡み合う纏綿状態となる。

発表者が行った親へのインタビュー調査により，親の回復過程は，【1. 薬物問題発生前】の状況に薬物使用の引き金となる【直接的契機】があつて【2. 薬物問題発見期】に至り，長く続く【3. 出口の見えない堂々巡りの混乱期】から【転機となる出来事】を経て，SHGのメンバーシップとプログラムに支えられながら【4. 自己覚知・問題明確化期】【5. 問題構造化・対処期】を行きつ戻りつしながら内面的な小さな変化の積み重ねによる成長によって【6. 家族関係再構築期】【7. 主体的自立期】へと進んでいくことがわかった（親の回復過程についての詳細は，日本社会病理学会（2014年10月）において発表）。

以上の動向をふまえ，本研究では薬物依存問題に直面した家族に対する支援方策検討の基礎として，親の回復段階ごとに関わりのあつた機関や支援の内容，各段階で必要とされる支援について探求し，継続的家族支援についての示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

親の回復過程において，①どの時期にどのような機関や人がかかわったのか，②親が回復過程において欲しいと思う支援はなにかの二点について整理した。対象は，長く続く混乱を通り抜けた状態にあつて回復までの経過を語る事が出来ると推測される，薬物問題を持つ人の家族や友人のためのセルフヘルプ・グループ（以下 SHG）に10年以上参加している親とし，機縁法によって募集した。研究協力者18名に半構造化インタビューを行い，16名分の逐語録を分析対象とした。インタビューは，2013年7月から11月に実施し，研究協力者の了解のもとICレコーダーで録音した。録音データを逐語化し，KJ法を援用して分類，整理した。

3. 倫理的配慮

本研究は，日本社会事業大学社会事業研究所倫理委員会の承認を得て実施した。研究目的・方法，不調の場合の即時中止，その場合の不利益回避を保証する旨を記載した書面および口頭で研究協力を依頼し，書面を以て同意を得た上でインタビューを行った。面接日時，場所については，協力者の意向に沿い，プライバシーが守られるよう配慮した。本研

究への協力は個人的なものであり、語られたことは SHG を代表とした意見でなく、個人の語りであることを論文に明記することを約束し、SHG の「12 の伝統」(ナラノン ファミリーグループ ジャパン 発行年不詳)に反しないよう配慮することを約束した。なお、本研究は公益財団法人医療科学研究所の助成により行ったことを明記した。

4. 研究結果

各過程において関わる機関、親が必要とする支援内容は変化した。

①どの時期にどのような機関や人がかかわったのかについては、【1. 薬物問題発生前】【2. 薬物問題発見期】【3. 出口の見えない堂々巡りの混乱期】には、本人の処遇や治療に関して多くの機関との関わりが頻回にあるが、親自身の回復について支援を受けたのは、フォーマルサポートとしては一部の精神科医療機関やカウンセリングルーム、精神保健福祉センターの家族教室参加が散見されるだけであり、「親の回復に役立った」と感じた多くが、家族や友人のための SHG や当事者活動を基盤とする回復施設などのいわゆるインフォーマルサポートであった。【4. 自己覚知・問題明確化期】【5. 問題構造化・対処期】【6. 家族関係再構築期】【7. 主体的自立/自律期】においては、支援のほとんどがインフォーマルサポートであることがわかった。

②欲しい支援については、全期を通して、「依存症を理解してくれる医療機関の増加」「新たな薬物問題への対応や知識を持った支援」「親に責任を負わせ過ぎない支援姿勢」「支援情報のさらなる広報」「緊急時に避難できる制度の活用方法や情報提供」「薬物依存に限らず生活に必要な制度などの紹介」といった要望があり、【2. 薬物問題発見期】【3. 出口の見えない堂々巡りの混乱期】においては、具体的かつ切実な要望が多数挙げられた。その他詳細は、発表当日に報告する。

5. 考察

本人の薬物依存問題が何らかの形で終息した後も、地域での孤立、配偶者との関係性の問題、本人以外の子(きょうだい)との関係の再構築など、親に残る課題や問題は数多く残存するため、長い経過に寄り添い、親の回復過程に応じた多様な視点と専門的知識を持った支援体制の構築が必要である。

親は本人にとって家族であると同時に、潜在的な支援ニーズを持っている「当事者」である。親を当事者としてとらえ直し、親の回復過程の各段階において親の抱える問題を整理し、生活困難に陥っている状況に対して各種制度の活用が可能なことを提示するなどのソーシャルワークの視点を持った介入および支援を行うことは、親を含む家族全体の精神的極限状態を回避する一助となる。また、【4. 自己覚知・問題明確化期】以降の親支援については、本人の薬物依存問題に潜在している精神疾患や発達障がい等の顕在化、薬物依存問題の進行による器質障がいの合併等によって本人に必要な支援内容が変化する可能性があるため、薬物依存問題に関する知識に加えて、広く疾病や障がいに関する専門的知識を持ち、ソーシャルワークの視点に立った支援の構築を行うことが今後の課題である。